昭和二十八年一月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈光

（通第四十六号）

目次

阿彌陀至德の御名……花田正夫（1）
意訳佛說譬喩經……聚墨生（8）
病間錄「月明」……長岡高人（11）

第五卷・第一號

阿彌陀至德の御名を聞く

花田正夫

阿彌陀至德の御名とは、南無阿彌陀佛の德号であります。さて日本の現狀を横に眺めますとき、內政に經濟に外交に、全く多事多難の茨の路を歩んで居りますけれども、念佛の上から申しますと、いやしくも日本人であつて、この御名を耳にし目にし口にしない者は生れ出て間もない嬰兒を除いてほかには一人も居ないと斷言しても過言ではありますまい。山間の辺鄙から、逆に繁華な都会の隈々まで、普及し伝承せられてゐるのが、南無阿彌陀佛の德号であります。

一、滿洲流布の「沒法子（メーファズ）」

扨て念佛の日本における普及を思ふにつけましても想ひ浮べられますことは、滿洲におきまして「沒法子」と言ふ一句の普及してゐることであります。私は戦前、大連市に二年近く居りましたが、滿人の男女貴賤を問はずよく聞かされたのがこの一句でありました。滿洲に居られた方であればこの句がもつ微妙な持味を御存じでせうが、私共日本人には仲々説明しつくせない內容を持つ言葉であります。文字だけの意味は「法子を沒する」で、手段がない、萬策つきた、どうして見やうもない、あきらめた、と言ふことでありませう。

私が渡滿の当初にこれを聞きました時は、退嬰的、消極的、あきらめ主義、無氣力、といふ風に、非常にいやな言葉として耳にひびいて、亡国民の象徴語として聞いて居りました。然し其後、当時の滿人の身に自分を一度おきかへて考へて見るやうになりました。長い間、或は帝政ロシアの專制下に生き、日露の戦争を期として日本の勢力下に生き、そのことがどんなにいやであつても、外地に移り住むことも出来ないで、そこに生活をして行かねばならぬ滿人の、親から子へ、夫から妻へ、友から友へと、心から心、口から口へと、自然に伝波し共感し普及して行つた言葉が、沒法子であるといふことに氣づかれました。

滿人にとつてこの一語は、事毎に積る心の塵埃を払ひ捨て、現在残された不如意なものの中から明日への活動を準備する掛け声であり、合言葉であります。心の垢を洗ひおとす風呂場であり、不如意の海中にやすらふ浮木であり、明日への生氣の養ひ場であるとも言ひ得ませう。

沒法子！と滿人が繰り返す一語の中に、苦悩の幾分かを軽減せしめられ、その中に極く僅かのあかるみを感じながら生きてゐるのでありませう。最近の滿洲は知る由もありませんが、おそらくは先祖代々の遺産として、矢張り随時随所で、沒法子、沒法子を繰り返しながら、彼等の生活は続けられてゐることでありませう。悪く聞けば、滿人を眠らす阿片的言葉でありませう。然しそれは人生萬事、自分の力で何とでも出来ると思ひ上つてゐる人々の見方で、私共、矢張り有為転変の極りの無い人生に幾山河を踏み越えて生きて行ねばならぬ身には、沒法子といふ言葉は何人にも無くてはすまされぬことであります。ただ沒法子と申す中に、或程度の諦観と除苦が與へられて、薄明りが射して来ることでありませう。それは急に暗い部屋に入ると何も見えませんが、しばらく経つと薄明りが感ぜられ、ぼんやりと物の形が見えはじめて、どうにか物につまづかないやうになれるやうなものであります。それでありますから沒法子と申す心の中には、絶望的な灰色の暗さが限りなく拡がつてゐて、新緑の海浜に立つて旭日を仰ぐといふやうな積極的な明朗さと活発さはそこに見出されないのであります。人間があらゆる苦難に遭遇して、涙の限り泣きつくし、怒りのままに暴れまはり、苦しみの限り悶え拔いて、その闇の底から何か薄明りが見えて来る、そして涙が自然に渇いて来て、消的極であるが、さし迫つた仕事を默つてどうにか始める心のゆとりと氣力が出る、さういつた風な心の息吹きを沒法子の一句に汲みとることが出来るのであります。

斯様な境界といふものは、私共にとつては堪へられぬ苦悩の挙句のはてであり、うつろなやすらぎでありまして、最もいやな境界でありますが、然し憂悲苦悩の人生の幾山河を旅して来られた方々は、矢張り私共の人生そのものが、好むと好まないとを問はず、さうした趣のあることを共感して下さるでありませう。つまり人生の旅路におきまして沒法子と云はずには居られない無数の問題が横たはつてゐるのであります。薄暗い人生の曠野を一人ぼつちで、あてどもなく、はてしもなく辿つて行かねばならない、誰れにも訴へやうもない、訴へてもどうにもならない淋しさを胸に湛へて行かねばならない、其処には沒法子とつぶやかずには居られない、斯うした情景を人生の旅路の到る処に散見せしめられるのであります。

解決のつけようもない無数の問題を脊負ひながら、逃れることも、捨てることも、死ぬことさへ出来ないで、あへぎあへぎ人生の山坂を越え、河沼を渡らねばならないのであります。春の野に出で胡蝶とたわむれ、野の花、空の鳥と遊ぶといふ風な青春夢多い時も瞬時に過ぎて、青葉若葉の壯年も何時しか紅葉と転じ、蕭々たる冬枯の老年が訪れて

来る「いろはにほへど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ」であります。そこには行方の知れぬ「うゐの奥山」が横たはつてゐるのであります。

二、南無阿彌陀佛の德音

以上のやうな人生の無限の寂しさ、孤独さをわがこととして体感いたします時、沒法子も繰り返されるでせうが、それだけでは未だその全面を覆ふ暗さが消え去らないのであり、そこに今一つの超人的無限の力がなくつてはならないのであります。

それにつけましても、南無阿彌陀佛の德音のましますといふことは、何といふ有難いことでありませうか。沒法子とくり返しながら生死のはてしない山河を越えて行くよりほかに途のない者に、佛陀の悲心、切々と燃えて、呼びかけ、名告り出て下さる声が、南無阿彌陀佛の德音であります。そこに久遠の暗黒が破られて、永遠の曙のひかりを仰ぎ、無量の光益を被るのであります。

この念佛の伝承されて居ります日本と、沒法子をくり返してゐる満洲とを思ひ併せます時、譬へば同じ一つの山でありましても、南側の雪はすでに消え去つてゐるのに、北側の雪は冬のままに残つてゐるといふ風景を初春の山地でよく見ることでありますが、それと同様でありまして、一衣帶水のへだたりをもつ満洲と日本に、彼地には沒法子の残雪が深く、此地には南無阿彌陀佛の陽光が射して居ります。

何といふ日本は有難い国土でありませうか、また何といふ恵まれた国家でありませうか。然し昔から「ローマは一日にして成らず」と申しますやうに、陽光の満ち渡る日本になるには、千三百年来の惨怛たるよき人々の腐心と労苦の汗と涙が流されて来たのであります。聖德太子は御自ら篤く佛道に帰依せられて「南無佛」と唱へられつつ、法隆寺学問所を建立せられ、四天王寺に社会救済所を設け、各地に道場を造り「萬国の極宗、四生の終帰」として佛道を地にひらいて下されたのであります。法然、親鸞の両聖は、伽藍ばかりが徒らに高く、内面滞滯と枯渇に窮してゐた平安、鎌倉時代の佛道を、死罪流罪の法難の渦中にあつて、能く法灯を地に掲げ、法脉を末代に遺して下されたことであります。

年頭、おとづれて下さる南無阿彌陀佛の御名、その無碍のみひかりに、生死罪濁の身さながらに、無限のやすらぎとやはらぎとあたたかみに満ち足らはされつつ、本源を遠くたづねて、深き洪恩を謝しまつることであります。

十方諸有の衆生は阿彌陀至德の御名をきき
真実信心いたりなば、大きに所聞を慶喜せん。
無碍光如来の名号とかの光明智相とは
無明長夜の暗を破し衆生の志願をみて給ふ。

払つても払ひやうのない沒法子の闇が、南無阿彌陀佛の無碍の光明に破られて行くのであります。そこに暗く冷たい心の底が満足せしめられ、沒法子の無表情なあきらめから生々潑剌たる生氣を恵まれるのであります。

私共は幸にも阿彌陀至德の御名の流布し伝承せられてゐる恵まれた国に生れさせて頂いてゐるのであります。そして無意識のうちにも、この念佛は人々の心を和らげ溫め明るくして下さつてゐるのでありますが、百尺竿頭なほ一歩を進めて、南無阿彌陀佛の本来の眞面目に接することが大切なことであります。

その本来の意義に氣づかないで、或はそしり、くさし、省みやうとさへしない人々の多いことは、誠に痛ましくも悲しい極みであります。すこし心掛のある方々は念佛に多少の価値を認め、念佛は心を靜めるに役立つとか、邪念を払ふによいとか、人生修養に大切だと申される方々もありませう。更に進んでは念佛にかぎる、念佛でなくてはいかぬ、と一日に何萬と唱へて居られる人々もあるのでありますが、いづれも「一水四見」の域にとどまるもので、見る人の心次第に大小厚薄とりどりに値ぶみしてゐるに過ぎません。餓鬼は水を火と観じ、魚は水を棲家と感じてゐるのと同様で、そしるもほめるも、その人々の境界に映る幻影に過ぎません。

三、念佛の本来の面目

念佛の本来の面目は、釈尊御自身が最もよく知られてゐることであります。その釈尊が大無量寿経の終りに、彌勒菩薩に名号を付属せられ、観無量寿経の終りには、聞法第一の阿難尊者に念佛を付属せられ、阿彌陀経には名号の大善大功德たることを釈尊を中心とせられて十方の諸佛が証誠して下さり、名号を執持するものを護念し続けやうと誓つて下さるのであります。

法然上人の御一代の教化は「往生之業、念佛為本」につき、親鸞聖人の御生涯は「獲得名号、自然法爾」の八字におさまるのであります。

南無阿彌陀佛とは、久遠劫から無明の大夜に迷ひ苦しんで浮ぶ瀬のない私共を、憐れみ悲しまれて、遠くはるかな昔から、私共の苦悩の限りをわが御事とせられて、やむにやまれぬ御心から、阿彌陀佛御自らが名告り出て下さる大悲の御名であります。恰もそれは母親が子に向つて「お母さんが」と名告り出るのと同様であります。本来「お母さん」とは子が母に向つて呼ぶべき名でありますのに、世の母親といふ母親が一人のもれなく、異口同音に「お母さん」と子に向つてつねに名告りながら、そこにすこしも矛盾が感じられないのはどうしたことでせうか。それは、母が子に向ふ時は何時も、子供の身になりきつてゐるので、その

時は母であつてそのまんま子になつてゐる、だから「お母さん」と子供の呼ぶ名で自分を名告るのが最も自然な感情の現れであります。

子が呼ぶべき名において自らを名告り出ずにはゐられない心、この心はその時始めて出る心ではありません。母の胎内に子が宿つた時から、親心の自然として、子供の身に親の心は強く結ばれて離れられないので、或は産着を用意し、子の名を選び、食物に注意し、昼夜に忘れやうとして忘れることの出来ぬ心で、生れ出るのをきざみとして、寒中に汚物を洗ひ、胸に抱き、背に負うて、念々に子とひとつながりになつて、連綿として断えることのない親のいのちが「お母さん」と名告り出るのであります。この限りない母の念力にはぐくまれ、もり上げられて遂に子も亦「お母さん」と呼びかへし慕ひ寄るのであります。

南無阿彌陀佛とは、佛御自らが、私共の佛に向つて呼び奉るべき御名をもつて名告り出て下さる德音であります。それは始めもしられぬ時、私共が無明忽然として起り、三界に流転し始めました時から、私共の煩悩の限りを見拔かれ、罪業と苦悩の隈々までしろし召されて、私共の一切の苦悩をわがこととして、悲心倦むことなくやむ時なく、切々哀々として名告り出て下さる、念々に私共とひとつながりになつて下さる佛陀久遠のいのちが、南無阿彌陀佛と名告り出て下さるのであります。そこに願力の自然に催されて、私共も亦南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と久遠の御親の御名を喚びかへさずには居られないのであります。そこに、親が子を呼び、子が親を喚びつつ、親と子が互に呼びつ呼ばれつ、一味のいのちにとかされて參るのであります。

経典に「衆生佛を念ずれば、佛も亦衆生を念じ給ふ。衆生佛を拜すれば、佛はこれをみそなわせ給ふ。衆生佛を称ふれば、佛はこれを聞し召し給ふ」とあります。佛の三業と衆生の三業とが「彼此金剛之心」として、切ることも断つことも出来ぬのであります。

わたしのこころが　あなたのこころ
あなたのこころが　わたしのこころ
わたしがあなたに　なるのでないが
あなたがわたしに　なるこころ。

これは妙好人の歌で、私が二十年も前に一度聞いて忘れられないもののひとつであります。私共の凡心と久遠の佛心がひとつにとろけて、大いなる生きたまことのいのちと転じ行く妙味であります。

四、ただ念佛のたのもしさ

子供の全生活は「お母さん」の一語にささへられおさめられてゐると申しても過言ではありますまい。朝目がさめると「お母さん」、外から帰ると「お母さん」、腹が痛い

と、「お母さん」、嬉しい時も「お母さん」であります。この声に應じて母は、病む時は薬を、空腹の時は食物を、嬉しい時は満面の微笑をもつて、子供の身心を満ち足らはせ、やすらげて下さるのであります。

私も亦「南無阿彌陀佛」の御名によつて、暗い心にひかりを頂き、苦しい心に温みを與へられ、怒りの心にやはらぎを惠まれて、時々刻々、念々に満ち足らはせて頂くのであります、そこに私の全生活が「南無阿彌陀佛」のひとつ、「ただ念佛」のひとつに、ささへられ、おさめられ、護られて參ることであります。

然し私の過去久遠の煩悩罪業は深く重いのでありまして眞実の信心の天を雲霧となつてつねに覆うてやまぬのでありますが、その逃れられぬ煩悩の強さ、しつこさを照し出されれば照し出される程、そこに無量無辺の大慈悲の発動をいよいよ渇仰申すことであります。

如来の作願をたづぬれば苦悩の有情をすてずして、廻向を首とし給ひて、大悲心をば成就せり。

身にもつ罪業の深重さと、煩悩の熾盛さを自照せしめられるにつけ、廻向を首とし給ふ大悲、即ち首にかけてもたすけずばおくまいとの大悲の切々たる悲涙を頂くことであります。

さういふことを感佩せしめられるにつけましても、南無阿彌陀佛の御名こそは不可称不可思議の功德の大宝海と讃仰申すほかはないのであります。

阿彌陀佛の御名きき歓喜讃仰せしむれば
功德の宝を具足して、一念大利無上なり。

四、自然の念佛と作意の念佛

生死出づべき道は念佛一つと教へられ、我が身もそれよりほかにないとまで知らされて、しきりに念佛申しながらも、時には法悦的氣分にひたり、又時には砂を嚙むやうに感じて淋しいたよりないといふ風になり、これではいけないと焦慮する、そしてよろこんでゐても何だか浮づいて落着けず、よろこべないとたよりない物足らなさがするのは「称名念佛すれども無明なほあり、志願の満たざる」状態でありまして「含華未出」、蕾の状態であると大無量寿経に教へ給ふところであります。梅の花も蕾を開かぬ間は清香があらはれぬのであります。そこに無限の物足らなさが続きます。さうした時、自分では、もう紙一重のところまで近づいてゐるかに感じて、しきりにあせるのでありますが、紙一重どころではありまぬ、そこには千里萬里のへだたりがあるのであります。丁度それは、水溜りに写る月影を見て、真実の月と思ひこんで、しきりにその月影を掴まうとあせつてゐるのと同様であります。真実の月は遠く中天に懸つてゐるのであります。

そこに紙一重位に思つてゐたことが誠に大きな間違ひであつた、独りよがりのうぬぼれに過ぎなかつた、煩悩の錯覚であつたと佛智から知らしめられる時、愕然とするのであります。そして自分の今迄の考といふものは皆間違ひであつた、方向違ひであつた、自分の今迄續けた努力は水面の月をもて遊んでゐたに過ぎなかつた、自分は微塵も月に近づける身ではなかつたと、根底から自見の覚悟といふものが崩れ去るところ、其処に、斯る駄目な身の全体を憐み悲しむで下さる大慈大悲がおのづと徹到して下されて、ひとへに本願をたのみ、念佛も申されるのであります。

そこに皆無のままが圓具、圓具のままが皆無といふ不思議が願力の自然として圓成するのであります。作意の念佛は、そのまんま自然の念佛と転ずるのであります。そこを卑近な例で申しますと、盲人の身は杖が無くては外出は出来ません。杖をおきなさいといくら云つてもそれは無理な話であります。然し、そこに人あつて「私があなたの手をとつて何処までも参りませう。あなたが杖をついて不自由な歩みをして居られるのを、実はずつと前から見るに見かねておりました。さあこれからは御側を離れず、私が杖となりませう」と言うて下さるならばどうでありませうか、もうそうなれば、杖は永久に無用となつて、その人に安心し満足しきつてまかせるのであります。佛陀とはその方であります、念佛とはその生き杖であります。然も僅かに人生五十年百年の旅の生き杖ばかりではなく、遠く浄土に導き入れて下さる金剛の生き杖であります。

信は願より生ずれば念佛成佛自然なり。
自然はすなはち報土なり証大涅槃うたがはず。

「人生僅かに五十年」と青年の頃から申し申して来ました私が、いよいよその年を迎へました年頭、旭日の四海を照す如くに、彌陀久遠のいのちの無碍の心光となつて無量無辺に照護して下さる至徳の嘉号を讃仰申して、五十路の坂の所感といたしました。

この原稿を書き終へました今、自分で自分の手足をなでながら、ようこそ生命があつたことよと、我と我身をいとほしむことであります。又この五十年の業報のままに辿り来ました随所に、久遠の佛の慈悲の御手と御声が纒綿として全身心に注がれづめであつたことを感じ、鬼心の私の瞳にも涙がにじみ出るのであります。

痼疾の身とてこれから何度正月を迎へ得ますことか、唯身にもつ業報のままに生き延びさせて頂くことでありませうが、それにつきましても「薪に火のついたやうに」私の業報の薪に彌陀佛の攝取不捨の火が常に離れることなく照護し給ふことであります。そこには善悪の業報のままにただ念佛申させて頂くばかりであります。

意譯佛說譬喩經

佛陀がある時、祇園精舍に住せられて静かに禪定に入つて居られました。すると佛陀のおみのりを聽聞しようと願つて沢山の御弟子達や信者の方々が、四方から集つて来て、佛陀を中心にして夫々の座について居りました。

その時、佛陀は禪定から出られまして、大衆を見渡されました。するとそこに勝光王が異様な聞き耳をたてて居られるのを見出されて「大王よ、自分はこれからひとつの譬喩を説くであらう。それは自分の心にうつる一切の衆生の相である。自分はつねに、一切の衆生が、はてしのない生老病死などの憂悲苦悩に深く沈みこんで、そこからどうしても浮ぶ瀬のないことが、痛ましく、悲しくてならない。どうしたならばその苦海から浮び上つてくれるであらうかと念じつづけてゐる。

大王よ、今これを説くから、あきらかに聽いて、善く心に入れて、わが身の実相を知り、久遠のまことの心をさとつてくれるやうに」と告げられました。勝光王は座を立つて佛陀に向ひ奉つて合掌し三拜して再び静かに座につかれました。佛陀はここにすこしく動遙した会座の大衆が、またもとの水をうつたやうな静けさに返ると、やをら金口を開かれて次の譬喩を説かれました。

「遠い昔のことであつた。或る村に一人の青年が住んでゐた。その男は毎朝未明に起きて東からのぼる旭日を毎日拜んでゐた。さうしてゐるうちにかういふことをを考へ出した。毎日毎日東の空を美しく染めて金色輝く太陽が現れてくる。して見れば、東の方へ東の方へと旅して行けば、きつと美しい国があるに相違あるまい。その道は遠く遙かであらうが自分はその国を求めて旅立たうと決心した。思ひ立つたら矢も楯もたまらないのが人間の常で、早速旅裝をととのへて東方へ東方へと旅立つて行つた。

然し幾日経つても、幾月たつても、毎朝相変らず太陽は東の空を紅に染めて、そのすがすがしい姿を現すけれど、その美しい国はちつとも近づけない、野越え山越え里越えて、幾山河を踏み進んだけれど、美しい国は何時も無限の彼方にしか見られない。

やうやく旅のつかれを覺えた旅人が、長い間住んでゐた故郷の村をこひしく思つて、辿つて来た後をふりかへつた。すると驚いたことには一匹の巨象が砂煙をあげながら広野を走つて旅人を襲うて来てゐるではないか。

旅人は怖れおののいて東の方に向つて走つた。然し巨象の歩みは早い、段々と追いつかれるのを知つた旅人は、身を隠すべき場所を探し求めた。するとそこにひとつの古井戸があつた、幸にも樹の根が垂れ下つてゐたので、その根をたどつて井戸の中に身をひそめた。

ほつと安心して深い井戸の底をのぞくと、そこには毒龍が口を開けて今にも旅人が落ち込むであらうと待ちかまへてゐる。井戸の四辺を見ると、そこには四つの毒蛇が蛇頭をあげて今にも飛びかからうとしてゐる。そして根につかまつて固くなつて震へてゐる旅人を根は巣作つてゐた蜂が沢山飛び出して手と云はず足と云はず刺し続ける。

萬事休して瞑目する旅人の耳に、ゴリゴリと言ふ音が間断なく聞える、よくそれを見れば黒白の二匹の鼠が樹の根をかぢつてゐる。然も何時の間におこつたのかあたり一帯を焼き尽して行く野火がメラメラと樹を焼いて行く。

絶望して空を仰いでゐると樹根の蜂の巣から五滴の蜂蜜がしたたつて旅人の口に入つた。渇ききつた旅人の舌には、その五滴の蜜が何とも言へぬ甘味で、旅人はその甘味ひとつで身の危険を忘れてゐる。」

佛陀がこの譬を終られると、王は早速佛陀におたづね申しました。

「この人は一体どうしたことでありませうか。僅か五滴の蜜蜂の甘味に溺れて、無量の苦を受けながらそれを顧みないでゐるとは、全く言語道断のことであります。」

佛陀はこの王の不審を明かにするために譬を次のやうに解説せられました。

「大王よ、よくきくがよい。東方の美しい国とは人間のもつ理想の国である。理想を追ひ求めて幾山河越え行くのであるが、欲求の無限なわれわれには満たされるといふ時は永遠に来ない。

斯くて旅行くうちに、故郷を思ひ出して後方を顧みると、自分達と同じやうに理想に憧れて旅立つた友達の多くが、或は病み、或はすでに死んでいる、そこに巨象の砂煙を立てて己の上にも襲ひかかつて来てゐることを知らされる。そこは無限の曠野である。

人生の短かさをそこに知つて、懸命に理想の方向に走るが、所詮は巨象から逃れる術もない。そこに一つの古井戸を見出して身をしばらくひそめる。

然し井底の龍とは死である。樹の根とは命である。四匹の毒蛇とは身体全体である、何時破れ、何時病むかもしれぬ身体のことを毒蛇に喩へたのである。蜂が群り刺すとは我々の妄念や邪念に四六時中常に苦しむ姿である。白黒の鼠とは昼と夜である、昼夜に生命の樹の根がきざまれて行く。野火とは老病である。

残る五滴の蜂蜜とは五欲の甘味である。月に向ひ花を賞でて憂悲を忘れ、美酒好食に醉うて苦悩をしばし払ひ、年老いては一夜の熟睡をよろこぶなど、僅かの欲、たまゆらの楽しみに醉ひしれて居る。

斯うしたわけであるから、大王よ、誰も逃れられないこの生老病死の限りない苦をよくしつて、唯僅かの五欲のためのしみばかりにうつつをぬかしては居られないことをさとるがよい。

智者はこれを自覚して、この無明のはてしない曠野を脱し、生死のはかりない古井戸の境界を超えて、永遠の道のひかりと、不滅のいのちを求めるであらう」

その時、勝光大王は、佛陀のこの譬とその解説をお聞き申して、如何にも我身は佛のお譬通りであつた。何といふ愚かな生活をして居たことかと、未だかつてない大きなおどろきを感じ、覚えず立ち上つて佛を合掌し、恭敬し、瞳目して一心に慈顔をおろがみ奉り、随喜の涙の中に、

「世尊よ。佛陀の御心の中には、かかる私共の哀れな相を知りつくされて、それを深くみ心に刻みこまれて、限りない御慈悲の御心で遠い昔から常に憐み悲しんで、念じ続けて居て下さつたのでありますか。それなのに私は未だかつて自分の実相にもめざめず、唯五欲の甘酒に醉ひしれて、私の四囲を無限に取りまいて居ります大暗黒と大苦悩をさとらずに居りました。よしんば多少それに氣づきましても私共の力でどうしてよいか、全く心も言葉も及ばない大暗黒であります。

噫、何と云ふ尊くも有難いことでありませうか。暗黒にあつて暗黒とも氣づかぬ狂人、氣づいたにしても萬策つきるほかにない無力無能の私共のために、世尊はすでに大悲を垂れ給うて、そのすくひの道を成就し、私共を待ちに待つてゐて下されたのでありますか。何と御礼申してよろしいやら、また何とおわび申してよろしいやら、唯合掌申すばかりであります」

佛陀は勝光王の佛意を頂戴して、随喜し、懺悔する姿を静かに御覧遊ばされまして

「善い哉、善い哉。大王よ、そこによく氣づかれた。このことを深く心に刻んで、終生真実の道を念じるやうに。五欲のとりことなつて放逸に流れてはならない」

その時、勝光王を初めとして群り聞いて居りました大衆も非常なよろこびを感じ、一人一人佛陀に向ひ奉つて合掌し恭敬して心満ち足らうて辞して行きました。

聚墨生意訳。

病間錄「月明」

長岡高人

本稿は昭和二十五年十月から十一月にかけて、肺疾のため病臥の床中に書き綴つたものである。一箇年半に亘る病臥から漸く立直つて床中でペンをとることの出来るやうになつた私は、安靜仰臥してゐた中二階の小窓から、見上げられる老樅の巨容に向つて、日毎心に浮ぶままを独白風に書き止めて唯一の慰めとした。この病間錄を底流するものは、同年十月、多年に亘つて懊悩し続けて来た信仰問題に大きな光明を惠まれた氣持の張りであつた。その頃はこの病間錄に筆を執り孤独思想のあり丈けをここに吐き出して非常な慰めを感じてゐたが、今読み返して見ても、この中の「月明」と「冬籠り」の二篇は何とも云へぬ郷愁に似たものを覚える。「月明」の一篇を草しつつ私は幾度か靜かな涙の溢れて来るのを禁じ得なかつた。そしてそれは未だに生々と胸底に流れてゐる。私はこの時始めて戦死した弟のために真に泣いたのである。ひとり心の奥底から涙を流したのである。そして弟の死によつてはじめて本当の弟の魂に遇ふことが出来たやうに感じたことである。

『月明』　対樅独白集

老樅よ。

今夜は月明の良夜である。澄みきつた秋の夜半の月光は、すべてのものをしつとりと照り濡らして、実に美しい。いや美しいといふ言葉も適当しないほど聖らかな光の美しさである。

月光如来―さういつた想ひに通ずる深くまろやかな神祕―それは、この美しい月光の中に、しみじみと心身をひたしきつたもののみ惠まれる、虔ましく聖い想念の世界である。

月光は、やはらかく天地をつつみ、萬象は、なごやかに月光に淨められる。

まこと、月愛三昧そのものである。

老樅よ。

美しい月光は、おのづからに魂の故郷を偲ばしめ、また人を心のふるさとにいざなふ。淋しき者の親しみの光、悲しき者の慰めの光――まこと月光は、私の心をいのちの源に導き還らしめる。

この世界――おのづからに逝きし人を想はしめ、このひかり――はるかに遠き者と語らしめる。

それは人間の感覺を超えた、想念の世界である。

老樅よ。

月光千里――私は北満從軍の弟を憶ふ。

終戦後すでに五年の歳月は流れた。だがこの間に弟の消息は絶えてない。病める老母は引揚げを待ちわび、孤独の兄は、帰還を念じた。

しかし、遂に引揚帰還は終つてしまつた。

老樅よ。

去年の秋のことであつた――当時引揚げて来た弟の嘗ての隊長から、弟は、北満国境の虎頭の町で終戦を迎えた筈だといふ、突然の、そして親切な通信を受取つたのは―。

しかも虎頭守備隊は、軍人・邦人全滅の悲運に陥つて、全く一名の生存者もない模様であるといふ――。

老樅よ。

弟は、北満特務機関に勤務を命ぜられ、終戦直前、国境虎頭に派遣されたものだといふ。そして八月八日。突如としてソ軍の侵入を受けるや、かねての計画にもとづいて、守備隊・居留邦人もろともに、既設陣地に拠つて戦闘を始めたとのことである。

しかし爾後一切の通信連絡は杜絶して、友軍の飛行機すらも連絡のすべが全くなかつたといふ。

老樅よ。

このソ軍の攻撃は、全く文字通りに寝耳に水の不意打ちであつたらしい。味方は殆んど防戦のいとまもなく、見る間にばたばたと薙ぎ倒され、国境附近のトーチカ陣地も、手榴弾攻撃で、みな殺しになつてしまつたといふ。

この一方的殺戮戦の弾雨をくぐつて、味方の部隊・邦人は既設陣地に拠つたものであらうか。

味方の防戦は全く死闘そのものである。だが洪水のやうに国境線を突破してくるソ軍に対しては、殆んどそれは蟷螂の斧にも等しいものであつたらう。

老樅よ。

もはや運命は決した――この虎頭陣地の死闘のさなか、弟は、どんな心でこの月を仰いだことであらう。

既に不意を衝かれて、戦闘準備のいとまをも失ひ、敵の重囲に陥つて、全滅の悲運は目前に迫つた時、弟は、やはり遙か故国に想ひを馳せ、家郷の兄母に、今生の死の決別をしたことであらうか。

そして人知れず、ひそかに、わずか二十四歳で終る自己の一生に、みづから悲涙を呑んだことでもあらうか。

老樅よ。

それから数日、虎頭陣地はなほも屈せず抗戦を続けたといふ。

この月は、やはり無惨にも、その人間の屠殺にもひとしい凄惨な戦場を、心なくも明るく、ありありと照らし出したことであらう。

当時の戦争指導者達は、生きて虜囚の辱を受くること勿れと命じた。

この虎頭でもまた、兵士・邦人・婦女子、みなこの命に服して死んで逝つたことであらう。

老樅よ。

しかも虎頭の死闘はなほも続いた。

ソ軍は、降伏の軍使を送つて来たともいふ。

だが、当時は一億玉砕の信念であつた。守備隊は、その軍使を斬つて、最後の一兵まで抗戦の決意を示した。
この間、すでに八月十五日――終戦の詔勅は発せられてゐた。
しかし、それが直に、北満国境のこの戦線まで伝はる筈もなかつた。
老樅よ。
終戦後二日目、八月十七日―遂に虎頭最後の日は来た。
そして守備隊残存者一同は、みづから火薬に点火して、全員、壮絶な自爆をして、相果てたといふ。
その当時、北満虎頭を照らしたこの月光は、やはり、この酷く惨ましい戦争犠牲者達の、無惨な屍をあらはに浮き出させていたことであらうか。
老樅よ。
弟は、この全員自爆の最後の日まで、生きて戦闘を続けていたことであらうか！それはこの月が物言はぬ限り永久の謎であらう。
しかし、今私は、ただ、それを信ずるよりほかに仕方がない。
或は、既に戦闘当初に、戦死してしまつたか。或は重傷昏倒の身を捕はれて虐殺されたか。または、萬死に奇蹟の一生を得て、この世のどこかに生存してゐることか。
しかし、この狀況では、萬々生きてゐるものとは考えられない。
老樅よ。
弟は――死んだ。
いくら繰り返して考えて見ても、やはり死んだと諦めるより致し方がない。しかし潔く自爆自決して死に果てたものと信ずるよりほかはない。
八月十七日――それが弟の命日である。
弟は幹部候補生を終つた時、自分は軍人が嫌いだから、再役を拒んだと云つて来た。
しかし、自分の希望が容れられず、命によつて特務機関に編入されたからには、弟の氣性としても、この世の未練を思ひきつて、立派に死んで逝つたに違ひはない。
老樅よ。
今夜のこの月は、今頃やはり、北満国境、虎頭の戦場を静かに、淋しく照してゐることであらう。
死闘、惨戦の後既に五星霜―戦場の相貌も、はや一変したことであらう。或は秋草繁る、荒涼たる山野と化したか、または戦後復興の小市街とでもなつたか。
そして今夜のこの月が、その上にも今明く照り渡つてゐることであらう。
老樅よ。
弟はやがて、遺骨もない敗戦の帰還をする。
しかし、それも今となつては、致し方のないことである。
ただせめて、この想ひが、かなふものならば、異国千里の幾山河、北満国境の虎頭の町に〃おお、ここが、お前の死んだところか〃と、弟の戦死の跡を弔つて遺りたい。
そして、弟のために、心の底から、そこでしみじみと悲

しんで、泣いて遺りたい。
老樅よ。
弟は無名の一兵士として、侵略戦争の哀れな犠牲者となつて、死んでしまつた。
しかし、親怨雙亡――今更に誰を恨むべきすべもなからう。
ただ、この二十四歳の若さで死んで逝つた、かあいそうな弟のために、本当に心の底から泣いて遺れるものは、母と兄―これ以外には、広いこの世の中には誰もゐないのだ。
私は、弟の赤い血潮に滲み染んだであらう虎頭陣地の土の一塊なりと、ぢつと手の裡に握りしめて、心から泣いて遺りたい。
老樅よ。
弟には、遺品もなく、また遺書もない。
〃なけけるか、いかれるか、はたもだせるか、きけ　はてしなき　わだつみのこゑ〃――
私はこの日本戦没学生の手記の裡に、弟の無言の遺言を聽いてやる氣持で、ひとり涙しつつ、それを読み続けてゐることである。
得体の知れない戦争に対する純真な懐疑と、故国の肉親に対する純情な思慕――この遙かなる山河に寄せた戦没学生の手記こそは、それがそのまま、弟の遺書なのだと、私はひとり心に想ふのである。
そして、この悼ましい懐疑と思慕とに対して、永遠の真実をもつて應えてやることが、この世に生残つた私の、生涯かけての悲願でなければならないと、深く心に期するのである。
老樅よ。
人間は、心の奥底から本当に自分ひとりのために泣いてくれるものを知ることによつて、始めて救はれる。無論私自身には、死んだ弟を救ふほどの力などはない。しかし、この無力非才な兄の私を通じて、人類すべての救ひのために、念願悲泣し賜ふ如来の永遠の親心によつて、死んだ弟をも救ひ上げて頂きたいと想ふ。
生前純情淡白な性格であつた弟は―また山野に親しみ、昆虫研究を唯一の趣味とした弟は、何の迷ふこともなく、真実に自分の死の中へと、死んで行つたことと信ずるのである。
老樅よ。
今夜のこの月のよさに誘はれて、私は想はずも遠いあの世の弟の想出話に、時のたつのも忘れてしまつてゐたやうである。
そして、またこの美しい月光に、心のおのづから浄い如来の国を想はしめられるのである。
「慈光はるかにかぶらしめ、光の到るところには、法喜を得とぞのべたまふ、大安慰を帰命せよ」
この世界―この慈光に触れることによつて、たとへ北満千里の果てに死んでも、弟はやはり必ず救はれるのだと、私は心に泣きつつも、涙の裡にそれを信ぜしめられることにおいて、心ひそかに安らぐのである。
（一九五〇・一〇・二五）

慈光第五巻第一号昭和二十八年一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

編集後記

新春を祝ぎ奉ります。慈光誌も第五巻をお送り出来ましたことは、何か不思議な感がいたします。ことに歳末以来、冥加、といふ言葉をひしひしと身に感じて参りました。冥とはくらしで表面に見えないことでありませう。加とは加護でありませう。目にも心にも知ることの出来ない世界からの加護を被るといふことであります。蓮如上人が常に仰せられたことであります。

顧みますのに、私の心は誠に浅薄で、現れたものの表面しか感じないのであります。念佛も申され、法悦の生活も続くと、そのことを喜ぶのでありますが、一口の念佛も私の口から出るやうにまで御心労し続けて下さつた、私に知られない、見ることも想像することも出来ない御苦労を忘れてかへり見ないのであります。

私共の見える世界、感ぜられる世界といふものは実に狭少なもので大海の一粟と申すべきでありませう。冥界、その広さ深さ遠さの極まりのない世界に、私を護りつづけて下さつてゐる、その冥衆の護念力で私の今日が存することであります。

小冊子を送らせて頂く、そして皆様に読んで頂く、そのことも言葉につくせぬ御恩ではありますが、さういふことの未だあらはれぬ以前の御恩の尚ほ深く尊く広いことを、冥加として有難く頂くことであります。

「お母さん」と子供が申せるやうになつた。それも大きな恩であり喜びでありますが、未だ言葉も出ない前の私に注ぎ込まれた心労は如何ばかりでありませうか。一声の念佛の中に久遠の御苦労を教へられることであります。それは知ることも量ることも出来ないものでありますが、それがなくしては一声の念佛も出やうがない、厳然たる事実、それを冥加の根本として蓮如上人は御信嘗下されたことでありませうか。そこがほのかに教へられて、海山の御恩といふ言葉が身にしみることであります。それにお應えする道は唯一つ、愚鈍の私を念佛申さすまで御育て下されたことでありますから、私の上に成就して下された念佛で御礼申すほかにありません。

お正月に晴着をきせられて「お父さんお目出度う」と手をついてゐる子供の姿が、私の念佛であります。

○

△「阿彌陀至德の御名」は五十歳になりました私の記念碑と思召して下さい。

△「譬喩経」の意訳文は思ひきつて達意的にいたしました。佛陀の御心に映じる衆生の様相とそれを矜哀して大慈悲心の中に攝めて下さる御恩を訓へられました。

△「病間録」は盛岡市鹿島下四の三、長岡高人氏の念佛裡に、戦没された御令弟を悼まれる、哀々たる詩であります。この外数篇ありますので御照会させて頂きます。

聚墨生記

昭和二十八年一月十日印刷
昭和二十八年一月十五日発行
毎月一回十五日発行
定価 一部金拾七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年金二百円（郵税共）
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 富田隆
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所
名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所 慈光社
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番